哲學研究　第百十六號

デイルタイの哲學的方法

勝部謙造

一

デイルタイの哲學的勞作の主要目的は所謂歴史的世界の構造を明にし、精神科學をばその哲學的基礎の上に根立することであつた。自然界とか、又自然科學とかは彼の哲學に於いて第一の關心ではなかつた。從つて自然科學的方法をばその特殊なる對象とするカント一流の認識論は、彼の哲學の中には這入つて來ない。それ等は寧ろ彼の哲學の Antithesis として間接的に役立つことが出來るのみである。この故にデイルタイの哲學は最も具體的にして又最も流動的なる Leben を以て其出發點とするものである。カントは凡ての認識は經驗と共に始まると云ふて居るが、(Kant Kritik der reinen Vernunft. Vorländers Ausgabe s. 47) デイルタイはこれに該當する地位をば Leben に與へて居る。彼に於ては Leben があらゆるものゝ根源であり母胎である。茲に於てデイルタイの哲學的方法の第一歩は卽ちこの Leben なるものが我々の意識に

現れて來る最も根源的な態度、卽ち體驗 Erlebnis といふのでなくてはならない。この體驗といふ概念は彼の哲學に於ける最も核心的なものであるが故に、彼の哲學的業蹟の殆ど凡てに通じて見出されることが出來るが、これが特に方法論的に取扱はれて居るのは[1] Ideen über eine beschreibende und zergliedernde Psychologie を中心にする彼の新心理學に關する諸考察である。

デイルタイはこの體驗の働卽ち Erleben をば、方法論上よりは說明 Erklären なる作用と對立せしめて居る。而してこの兩方法の對立は更にこれ等の方法がそれ〴〵適用せられる二種の對象界、卽ち精神界と自然界との對立を豫想して居る。何となれば前者卽ち精神界を對象とする精神科學を眞に根立せんがためには、みだりにこれに後者卽ち自然界を對象とする自然科學の方法を適用することなくして、對象に個有なる方法を決定しなくてはならないからである。(Ideen über eine beschreibende und zergliedernde Psychologie—Diltheys Gesammelte Schriften Bd. V. s. 143 以下略語 Ideen)

自然界に對しては何故に Erklärung なる方法が用ひられなければならないか。それは畢竟自然界は間接的世界であるからである。卽ち自然は我々の意識に對し所謂現象として外から與へられ、而かも們々別々に何等の秩序聯絡なくして現はれる

ものである。自然に秩序あるが如くに考へるのは、それは我々が一度意識の世界に引き入れてそこで組み立てゝ見たものである。從つてかゝる對象は我々が外面的にdeutenすることに依つて初めて明らかにせられることが出來る。換言すれば自然は自然としてそのまゝに我々の意識に現はれるものではなくして、我々の見る自然は實は我々に依つて構成せられたる自然である。而してかゝる構成が行はれんがためには所謂假說Hypotheseなるものを必要とする。假說とは卽ち凡て何等かの對象に就いての經驗の總體を歸納法に依つて補足する推理を云ふのである。(a. a. o. s. 140) 凡ての自然科學はかゝる推理に依る假說の構成である。而して斯種の學の進歩は卽ちかゝる假說が歸納の擴大に依り檢證確定せられて定說となり、進みては實に新しき假說を生むといふ處にある。かゝる假說を使用する構成的態度をばErklärenと名づける。この故に自然科學の方法は卽ち說明法で、假說は斯學發展の必然的條件である。

かくの如き意味に於ける說明法に對立するのが卽ち體驗法である。而してこれはもとより精神界に個有なる方法である。同時に又これは自然科學の說明法よりは一層根本的の方法であつて、哲學が又取つて以て自己の方法となすべきものであ

る。何となれば所謂 Der Satz der Phaenomenalität に依り、我々に對して存在する凡てのものは悉く我々の意識の事實であるから、精神界は卽ち自然界よりは一層本質的の世界であり、哲學は卽ち精神の學でなくてはならないからである。(Dilthey :—Beiträge zur Lösung der Frage vom Ursprung unseres Glaubens an die Realität der Aussenwelt und seinem Recht G.S. Bd. V. s. 90 以下略語 Beiträge)

二

然らばこの體驗法の對象界たる精神世界は、自然界と比較して如何樣なる相違點を有するものであるか。それは卽ち自然界が間接的なるに對して、この精神界は直接的なるものであるといふことである。自然は deuten せられなければならぬが、精神生活の事實は直接に與へられるものである。「外的知覺とは反對に我々の內的知覺は Innewerden もしくは Erleben に基づくものであつて、直接に與へられる。こゝではかゝるものに伴ふ感覺や知覺に於て ein unteilbar Einfaches が與へられる。菫色の感覺が如何樣にして成立するにしても、內界の現象として見れば一の不可分割的である。」(Ideen. s. 170) 從つてかゝる對象界に對しては、說明とか構成とかいふ如き間接的な

方法が用ゐられることは正當でない。直接的な對象には矢張り直接的な方法がなくてはならぬ。こゝでは所謂自省 Selbstbesinnung の態度が持せられなければならない。これが卽ち Erklären に對立する Erleben である。

かくの如くにしてディルタイの所謂精神科學的哲學の根本方法は、精神世界の基本的な特徵に基づいて決定せられて居る。このことは又彼の哲學に於いて心理學が如何に重要なる位置を占むるものであるかを示すものである。カントが自然科學的方法の認識論を建設するために數學の力を多分に借りたと同じ意味に於いて、ディルタイは彼の歷史的精神科學の基礎となるべき哲學に就いて心理學の助力を仰がんとしたのである。然るに在來の心理學殊に聯想派とか、ヘルバルト派とかの心理學は、全然かくの如き重任を果すべき力を缺除して居る。何故に然るかといふに、それ等の心理學は凡て說明的構成的態度を取つて居るからである。卽ち自然界の研究に個有なる方法をば直ちに精神界に擬して居るからである。直接に與へられる精神界の事實には Hypothese をば必要としない。又かゝる世界の秩序聯絡は內面的に直接に與へられるものであるから、說明法に依つて外面的に解釋せらるべきものではない。心理學の方法は物理學や化學のそれとは全然別異なものでなけれ

ばならない。假說や說明はこゝでは自然認識の場合の如き働を持たない。これ在來の說明心理學が一般精神科學の根立に役立たず、反つて其發展を阻害することが多かつた所以である。(Ideen. s. 142f.)この故にディルタイは新に精神生活の事實をば、記載、分解、及び比較の方法に依つて解明する記載分析的心理學 Beschreibende und Zergliederunde Psychologie なるものを主張して居るのである。

三

ディルタイの體驗なる概念が哲學的方法として有する意義に就いては、上に述べし點のみでは未だ明晰を缺いて居る。茲に於いてか我々は進んでディルタイのこの體驗なるものが如何樣なる積極的內容を有するかを一層正確に調べて見なければならない。ディルタイの門人ミッシュは師の思想を布衍して、體驗が Wissen とそれからこの體驗作用に依つて Innewerden せられる realer Vorgang なの „unauflösliche Einheit“ であるといふて居る。(Misch:—Vorbericht des Herausgebers in Diltheys G. S. Bd. V. s. LXXIXf.) 卽ちこゝでは知る働と知らるゝ生命の流れとが全く合致して居る。視らるゝ對象と視る眼との間に未だ區別が立てられて居ない。ディルタイの所謂生が生を把握

する」最も根源的境地である。(Aufbau der geschichtlichen Welt in den Geisteswissenschaften s. 66 Stein 引用に據る)

かく體驗の特性は先づ其根源性といふ處にある。即ち對象と作用との一致にあるのである。これ本來この體驗なる語が最も根源的なる意識をあらはすものであるから、寧ろ當然なことであると云はなくてはならぬ。然るにかゝる最も根源的なるものは同時に又最も具體的なるものでなければならぬ。デイルタイは「體驗といふ語は……生命の流れの一部分を示すものである」又 „Erlebnis bezeichnet einen Teil des Lebensverlaufs, in seiner totalen Realität, also konkret, ohne Abzug, welcher teleologisch angesehen, eine Einheit in sich hat." と云ふて居る。(D.G.S. Bd. VI. s. 314)即ちこの全體的實在性といふ處に餘程重要な點が認められなければならぬ。生命を生命として捕捉することは抽象的思惟では出來ない。抽象的思惟に於ては生命は對象的となる。(a. a. o. s. 313)即ち體驗の第二の特徴はその具體的にして且つ全人的全我的なる點にある。全體性といふ處にある。從つてこれを哲學的方法として取扱ふ場合には、純知的のものでないことを認めなければならぬ。體驗は「意志や感情や表象作用に於いて樣々の側面を示す實在的生命過程を營む全人性 ganze Menschennatur の作用である」と見なくては

ならない。(D.G.S. Bd. I s. XVIII)

根源的にして且つ具體的全體的なる體驗は、同時に最早これ以上の根源に溯ることを許さゞる最後の事實である。それは只或る性質的の規定を有するだけであつて、其他には何もない。從つて若しかゝる體驗の背後に、若しくは根柢に、更に何物かを豫想するときはそれは抽象的思惟の迷妄に陷るものである。例へばアプリオリといふ如きものを立てるが如きは其一例である。哲學の問題を解決するものは固定不毛なる認識能力のアプリオリといふやうなものではない。却つてそれは我々の全體的存在から出發する發展史的な見方でなくてはならない。この故にかゝる性質的に規定せられたる實在としての體驗が最も根源的なものであつて „Nichts ist für uns dahinter" である。(Einleitung in die Geisteswissenschaften D. G. S. Bd. I s. XVIII)

流動的なるLebenが現はれて而かもそれが根源的統一性と具體的全體性とを失はざる所以のものは、元來このLebenの具體的發現たる精神の世界には、關聯Zusammenhangもしくは構造關聯Strukturzusammenhangといふことがあるからである。この精神生活の關聯が實に體驗其者を可能ならしめて居る。この世界に於いては一々の出來事が皆全體の關聯に結合せられて、有機的の關係を保つて居るといふことがあつて、初

めて我々の個々の體驗にもLeben全體の姿が寫し出され得るのである。然るに他方では又我々が體驗するものは何であるか。レーベンに依つて捕へられるのは卽ちレーベンである。而して其レーベンたるや具體的根源性を失はないものでなくてはならないから、それは我々が自然界に外から意味をつけて解釋するやうなのとは場合が違ふのである。內から捕へられなくてはならない。內から捕へるといふことは、レーベンをばレーベン自體の構造關聯に從つて捕へるといふことである。所謂"Leben ist überall nur als Zusammenhang da!"である。(Ideen s. 144)生命は卽ち常に關聯としてのみ我々の體驗に與へられるものである。而してこの關聯は體驗に依つて初めて捕へらるゝものである。「構造關聯は體驗せらるゝものである」。(a. a. o. s. 206)

九

然らば卽ちこの關聯とか又構造關聯とかいふことに依りてディルタイは果して如何なるものを意味して居たであらうか。先づ所謂精神生活の構造とは如何樣なることを言ふのか。蓋しレーベンの各統一體は自己の棲息する環境に依りて制約せられると共に、又反對にこちらより進んで環境を支配することが出來るものであ

る。この交互關係よりしてかゝる生命の統一體の內面的狀態に或る組織(eine Gliederung)が成立するものである。デイルタイはかゝる組織をば精神生活の構造(Die Struktur des Seelenlebens)と名づけて居る。彼の記載分析的新心理學はかゝる構造を把捉するものであるから、これは實にかゝる精神的系列をば一大全體に結合する關聯を思はしめる。かゝる一大全體は卽ち所謂 Leben である。(Ideen s. 200)

『デイルタイの所謂精神生活の內面的構造には色々な特性があるわけであるが、今其中で最も一般的なものを擧げて見ると次の三つに歸することが出來る。第一には精神的生命過程は根源的に、又常にその最も初步の形式より最高のそれに至るまで一の統一體であるといふことが卽ちこれである。精神生活は部分から合成せられたり、要素より組み立てられたりした複合體 ein Kompositum ではない。精神生活は根源的に一の統一である。而かも絕えず擴大して行く統一である。この統一體からして樣々な精神的機能が分化して行くのであるが、然しそれ等の機能はどこまでも精神生活の統一的關聯に結合せられて居るものである。かくてその最高の階段の表現に達すると、或は[意識の統一]とか又は[人格の統一]とか呼ばれるこの Einheit の事實が、精神生活をば物體界の全體と全然區別するものである。(Ideen. s. 212)

精神生活の構造の第二の一般的特徴は、如上の內面的關聯は生命の統一體が或る環境內に於いて占める狀態に依つて制約せられるといふことである。蓋し具體的統一體をなして居る凡ての精神生活は、常に外界と交互作用をなして居るものである。かゝる交互作用の特殊なる一事實として、精神的のレーベンでありながら一方に自然的な肉體を伴ひる所謂精神物理的生命の統一とその外圍の狀態との間に行はれる「順應作用」Anpassung が擧げられることが出來る。我々の感覺作用の系列と運動過程の系列との結合は、かゝる順應作用に於いて遂行せられるものである。人間のレーベンは其最高の形式に於いても、矢張り斯種の全有機的自然界の大法則に從はねばならぬものである。我々の周圍に於ける「現實的なるもの」からして感覺が喚起せられる。この感覺は我々の外部に於ける雜多的な原因の特性を表出するものである。かくして知覺や心像が生じ、更に進みては思惟過程を生み、これが又逆に外界實在に對して一定の征服を行ふことを可能ならしむるのである。然しながら知覺や思惟が孤立して働くのではなくて、更にこれに價値決定や意志運動が纏綿してレーベン其物の流動進展を實現して行くものである。(Ideen. s. 212)

かくの如くにして精神生活は漸次其關聯を確定顯現して行くものであるが、かゝ

る生命の關聯 Lebenszusammenhang の第三の根本特徴は、この關聯内に於いて各肢體は外界自然に於いて行はるゝが如き因果に依つて結合されて居ないといふことである。蓋し外界を支配せる因果は原因と結果とが性質上及び分量上同等であるといふ關係である。所謂 Causa aequat effectum といふのである。かゝる因果律は我々の體驗に現はるゝ精神生活の關聯を適用することに依つて外界に附與せられたる現實界の關聯に其根源を有するものである。この故に表象より感情に、感情より意志活動に推移する根源は、表象にも亦感情にも認められることは出來ない。レーベンは其具體的全體としての關聯に於いて、かゝる相互に異なれる成素を結合して居る。其結合を行ふ關聯自體は全く sui generis のものである。合目性といふ如き概念は決してこの根本特性を說明する役には立たない。それは只かゝる精神關聯の體驗中にふくまれて居るものを表現するに止まる。而してその表現たるや決して完全ではない。只かゝるレーベンに特異なるものをば概念的略號に於いて表はせるに過ぎないのである。(Ideen s. 212f.)

五

デイルタイは我々の體驗に對して與へられる生命の關聯の一般的特性として以上の三點を擧げて居るのであるが、其外に尙精神生活の關聯の特質を明にするものとして今一つの特質を擧げて居る。これは卽ち第二部類の根本特徵として上に擧げた三つのものに對立する一大特性である。それは精神生活の發展 Die Entwickelung des Seelenlebens といふことである。蓋しレーベンは必然的に發展することを豫想せしめるものである。この發展といふことゝそれから上に述べた關聯といふことは相互に制約し合ふものである。人間の發展といふことは人間の存在の廣汎なる關聯を知ることなしには考へられることが出來ない。それと共に又レーベンの發展といふことを考へずして、その關聯を明にすることは出來ない。これ具體的であつてしかも流動的であるレーベンには、根本的の特徵でなくてはならない。この故に心理學等に於いて精神生活の構造を明にせんと欲せば、我々は既に成熟せる人間の精神生活を對象にしなくてはならない。一方では成熟既成の人間の類型 Typus を記載し又分析すると共に、他方ではかゝる類型の普遍的傳記 Allgemeine Biographie の如きものに依つて發展的にこれを見て行かなければならない。

かゝる生命の Vorandringen に就いて第一に考ふべきことは、レーベンの構造關聯に

備はれる合目性 Zweckmässigkeit といふことである。我々の衝動や感情に於いてかく前進せしむる動力としての合目性が既に現れて居る。生命の統一體を制約する外圍の事情が阻止的であつても亦促進的であつても、衝動滿足の狀態とか幸福の狀態とかを招來保持せんとする努方が喚起せられる。精神生活の各成素の關聯がかゝる方面に作用する場合が眞の合目性である。目的は外より與へられるものではなくて、精神生活の關聯の素質として內在して居るものである。この故に精神界に於ける合目性は內在的であり又主觀的である。主觀的といふ意味は體驗に於いて與へられるものであるといふことである。內在的といふのは體驗以外の目的觀念に基づいて居るものでないといふことである。要するにこの精神生活の發展はレーベンの構造關聯自體の中に備はれる Unruhe がかゝる Tendenz を生むに至るのである。かくしてレーベンは一種の不可抗力を以て前進しつゝあるものである。(vgl. Stein :- Der Begriff des Geist bei Dilthey s. 39)

次に生命の發展に就いて第二に考ふべきは、生活の諸價値 Lebenswerte といふことである。價値は感情と不可分的のものであつて、此點に於いてレーベンの認むる價値は矢張り精神的の實在である。然しながらこれは價値が感情より成立すること

を說くものではない。却つて感情は價値を體驗表出する働である。精神的關聯が合目的であるといふのは結局レーベン其者がかゝる生活の價値を發展し、これを確保し又增進せしむる傾向を有するからである。これ實に精神生活が自然界の因果性とは全く類を異にする動力に依つて前進する所以である。

レーベンの發展に就きて第三に認むべき點は、かく合目的にして、又價値を認め、これを確保增進すべく發展することに依つてレーベンは eine zunehmende Artikulation を招來するといふことである。即ちこゝに於いて生命の關聯の機能が一層明確に顯現して來るのである。如何にして然るかといふに、この發展作用に依つて時間的に分離せられたる個々の體驗が一の Verhalten に從屬せしめられ相互に結合するに至るからである。かくして一の生ける全體的活動に結合せられることに依り、個々の體驗の意義が明かになり、こゝにレーベン其者の波動が確實に目擊せられることが出來る樣になるのである。それと共に又かゝるレーベンの縱の關聯の中に結びつけられたる一々の體驗は eine freie Selbstmacht を獲得するに至るものである。

この全體的の發展といふことは又レーベンの流動に於ける各階段に於ける意味をそれ〴〵に個有なものにする。人生の各時期は各々特有の價値を有するもので

あることが明になる。幼年期の夢想時代は未だレーベンの顯現が充分に行はれて居ない處に獨特の意味がある。未だ發展し窮さゞるがために空虛であり無價値であるといふことは言はれない。かゝる時期にはそれ相當のレーベンの活動がある。從つて後の時期の準備時代としてより以外に意義がないといふ風には考ふべきではない。老境に入りての生活も矢張り同樣である。發展はレーベン其物に內在するが故に凡ての生活は前進せざるを將ない。そこに人生の意味があり、又價値があるわけである。(Ideen s. 213 ff.)

六

次にディルタイは精神生活の關聯に關する第三の主要事實として精神生活の收得關聯 erworbene Zusammenhang des Seelenlebens といふものをあげて居る。今我々が上に述べしディルタイの精神生活の關聯といふのは卽ちレーベンの橫の構造 Struktur im Querschnitt を示すものであり、次に精神生活の發展といふのは卽ち縱の構造 Struktur im Längschnitt を現すものである。茲に云ふ第三の精神生活の收得關聯とは、この縱橫の構造が合致して具體的一全體となれるものを示すものである。換言すればレーベ

ンの發展の成果を示すものである。

既に具體的一全體を成すものであるからには、この收得關聯は只全體として作用するものであつて、各肢體は其中に就いては充分明確に區別せられることが出來ない。其中に結合せられある各成素間の關係は明晰に意識せられることは出來ないが、然しそこに結合せられ又作用せることは事實であるといふ狀態に置かれて居るのである。

この收得關聯なるものに就きてディルタイ自身の所說は、あまりに具體的なるがためにやゝ明晰を缺ける點がある。然しながら我々の見る處に依ればこれは彼の Struktur とか Zusammenhang とかいふ考からして、後に我々が述べんとする類型 Typus なるものに結びついて行く稚移點を示す主要概念である。ディルタイはこれを解して「凡ての成熟せる人間に vorliegen する凡ての共通的方面を包括する恒常的關聯である。……然し又レーベンの個性化の規則も結局はこの收得關聯に求められなければならぬ」と云ふて居る。(Ideen s. 235f.)

シュタイン(a. a. o. s. 42ff)はディルタイのこの收得關聯に就いて次の三つの特性を擧げて居る。卽ち第一にこの收得關聯は所謂 freie Selbstmacht として働く方面を具

へて居るが故にschöpferische Einbildungskraftを持つて居るものである。精神生活が收得關聯に依り具體的全體として働く時は、其働き方はレーベン其者として働くのである。如何なる心像であつても皆具體的な生命を有する出來事である。それは絶えず生れ發展し又消滅する。聯想心理學等で說く聯想といふのも結局は創造である。凡ての精神生活は絶えず"Metamorphose"を行ふて居る。記憶といふやうな働も矢張り、Metamorphoseである。かく變化流動することに依つて精神生活は絶えず新しき創造を行つて行つて居るものである。(vgl. Dichteriche Einbildungskraft und Wahnsinn. D. G. S. Bd. VI. s. 98ff.)

收得關聯の第二の特徵はFestigung seiner Funktionenと言ふことである。精神の關聯は發展することに依つて漸次自己自身を顯現して、其構造を確定するものである。持續的の感情とか、同情とか、活動や其結果に對する滿足とかに、我々の情慾の孤立せる力の結合、我々の想像力の訓練、又客觀性への服從が基づいて居る。收得關聯が生活の一々の要素を暗默の間に支配し得るのは、全くこのレーベンの機能が確定せられて居ることに依るものである。

次に收得關聯の第三の特徵はRegelhaftigkeitと言ふことである。規範Normといふや

うなことはこゝからして見られなければならぬ。全體的具體的なレーベンの統一體であるから、こゝに其一々の部分に對して規範を示すことが出來る。規範は卽ちこの收得關聯の中に含まれて居るものである。我々の行爲の規則、我々の哲學的宗教的の歸依服從は皆この收得關聯に其根柢を有するものである。

以上の三特性に依つて見ても明である如く、ディルタイの云ふ收得關聯では結局我々の生活の樣々の意義を悉く包括する一大動的全體を云ふのである。卽ちレーベンの樣々の關聯をば縱と橫とから考察したものを、抽象分裂の弊から救つて具體的一全體に還源して見たものである。從つてこれは單なるLebensweisheitとは異り眞に生活を指導し、全體的なるレーベンを暗默の內に動かすことが出來る。知的抽象的な語の內で比較的この根本事實を近くあらはすものは人格Persönlichkeitといふ語である。然しながらこの語が動もすれば個性的差異的方面の色彩を强く帶びて用ゐらるゝに對し、ディルタイの言ふ收得關聯は共通的類型的方面を高調したものである。

以上に就いて我々は體驗の哲學方法的意義を求めて、この體驗作用を可能ならしむると共に又體驗の特殊對象たる精神生活の諸關聯を見た。これを要するに體驗

なる方法の最も特異とする點は、其根源性と全體性とにあると云はなくてはならない。根源的なるが故に最も直接的である。全體的なるが故に抽象を去つて具體について居る。卽ち我々の全心意が働きレーベン其物の中に深き根柢を有し、作用と對象とが未だ截然と區別せられざる狀態が卽ち體驗といふべきものである。（未完）

註、1）デイルタイの Erlebnis に關する所說には此外尙

Das Erlebnis und die Dichtung s. 196ff. (Erlebnis und Dichtung)

Gesammelte Schriften Bd. VI. s. 313ff. (Fragmente zur Poetik)

がある。殊に後者は此問題に就いては貴重なる文獻である。

（2）デイルタイの記載　分析、心理學の組織及び內容に就いては、こゝには此稿の本旨に關係ある部分のみを叙說した。從つて其點に就いては

拙稿「デイルタイの記載的分析的心理學」哲學研究　第三卷第九册

拙著「デイルタイの哲學」八十二頁以下